

## 少年時代の思い出

西区・甲北支部 林 敏雄

昭和4年6月、東京の四谷で生まれた私が3歳の頃、当時陸軍の軍人だった父は大分県佐賀関の要塞司令部に勤務していた。佐賀関は豊予海峡に面した港町で、関サバで有名で、数年前、食べにいったら流石に美味しかった。幼年の頃、家の前の溝に子蟹が一杯いて、隣の子とオシッコをかけて遊んだのが記憶に残る始まりのようだ。その後、父は陸軍参謀本部勤務に変わり、東京に戻った。

5歳になった頃、父は上海の日本大使館武官室勤務となり単身赴任した。家族は私より5歳年長の兄の小学校が夏休み中に上海に渡り、合流することになった。その時両親の故郷である鹿児島に寄った。東京から長いこと汽車に揺られて鹿児島に着き、母の実家がある姶良郡福山町に行った。福山は錦江湾の小さな港町で目の前に桜島が聳えていた。祖母がまだ健在で、2銭銅貨を1枚下さったので駄菓子屋に走った記憶がある。

船で上海に渡るため鹿児島から長崎に移動した。長崎は坂が多い街で、少し坂を登れば素晴らしい港の全貌が眺められた。船は白山丸という当時としては大きい客船で上海から欧州までいっていたという。いざ乗船してみると母は船酔いで上海に着くまで殆どベッド上で過ごした。市内を流れる黄浦江が長江と合流する辺りはバンドと称し、新旧の高層ビルが林立し、大都会を思わせた。

住居は英國との共同租界にあり、鉄筋3階建てでテニスでも出来そうな広い芝生の庭があった。2階が生活場所で日本語の上手な中

国人のオバさんが住み込みでいて、家の合間に私と遊んでくれたりした。

4階は何か仕事場らしく父からは行くことを禁じられていた。父は陸軍少佐の軍人なのに軍服を着ていたのを見た事が無く、毎日平服の職員が出勤してきた。車庫には黒塗りの公用車と小さなワーゲンタイプの車があり、ドライバーのKさんが暇な時には私を乗せて近所をドライブしてくれた。或る日ドライブ中に私がダルマギアを動かしたら、驚いたKさんに叱られてしまい、それっきり乗せてくれなくなってしまったので悲しかった。また別の日にこっそり4階に昇ってドアの隙間から部屋のなかを覗くと、8畳くらいの壁に無線機械がぎっしり詰まり、職員が無線を傍受しているようだった。後に分かったことだが、父は暗号・情報専門の参謀で、色々と中国軍の情報を集めていたらしい。

これら辺りは高級住宅街らしく近くには一緒に遊ぶ子供もおらず、母がたまに父の同僚の家に訪問した時、そこの子供と遊ぶのが楽しみだった。従って一人で家の付近をローラースケートで滑ったり、夏は庭の木で鳴いているミンミンゼミに似たセミを探って遊んだ。

父が暇な時、夜は家庭麻雀を楽しんだ。休みの日には父が車で街に出てデパートに行き玩具や本を買ってくれた。交差点ではターバンを巻いた厳ついインド人の巡査が交通整理していたのが印象に残っている。当時インドは英國の植民地だった。

或る日上海郊外の吳淞に行った。ここは黃

浦江沿岸で中国軍の要塞のある場所で、父が家族をバックに写真を撮った。すると背の高い高梁畠の中から突然、銃剣を構えた中国兵が現れ何か叫んだ。私は殺されると思って恐怖に怯えた。父は持っていたステッキをぐっと握りしめ、落ち着いて中国語で説明し出した。暫く聞いていた兵は納得したのか、速やかに立ち去れと言ったようだ。私は助かったという思いでホッとして母の手を握り締めて立ち去った。

6歳になった時、現地の日本人小学校に入学した。担任は女の先生だった。

少し年代をさかのぼると、日本が昭和7年3月に清朝のラストエンペラー溥儀を担ぎ出して満州帝国を作つてから、當時那と呼ばれていた中国とトラブルが絶えず、同年に第一次上海事変<sup>シナ</sup>が起きた。一応治まつたが不安定な情勢は次第に増加し、学校の1学期が終わった段階で、家族だけ帰国することになり、私は東京杉並区高円寺の第4小学校(略・杉四)に編入された。昭和12年7月、盧溝橋で戦闘が始まり、日支事変となつた。お互い宣戦布告をしなかつたので、戦争でなく事変というまま戦闘が続いた。

杉四時代、私は毎日戦争ゴッコやチャンバラ遊びに明け暮れ、勉強した記憶は無く成績は最低だった。2年生が終わる頃、兄が麻布中学(旧制)に合格したので、近くの赤坂区(旧)青山に引っ越すことになり、私は青南小学校(略・青南)3年に転入した。郊外の高円寺に比べ青山は山の手の住宅地で、明治神宮の表参道入り口近くに家があり、東京に一本しかない地下鉄が、渋谷から上野まで走つていた。

青南は1学年5クラスで、まだ男女別学の時代で1~3組までが男子あとが女子だった。

クラスの話題は杉四と異なり、6大学野球の試合等で、路地で紙芝居を見たり、ベーゴマやメンコで遊んだという子供はいないようで、私はカルチャーショックを受けた。勉強は予習・復習をきちんとやる子ばかりで、私も勉強を始めたら負けず嫌いの私は成績がどんどん上がって5年生になった時、遂に2組の級長になってしまった。

クラスにトップ3人組というのがいて、山崎君・福岡君に私だった。面白いことに3人共親が鹿児島の人で、山崎君の父上は枕崎出身でプリンストン大学を卒業して慶應大学の英語教授、福岡君の父上は曾於郡大崎町出身で青南の教諭をなさつていた。将来福岡君とは七高(旧制)で一緒になるが、両君とも東大を出ている。私が山崎をヤマザキというと、鹿児島ではヤマサキと濁らないんだと山崎君から注意されたのを覚えている。この3人はペーパーテストでは殆ど差はないが体育は別で、剣道や水泳の他校試合には選手として私が出たし、鉄棒の蹴あがりは私しか出来なかつた。或る時、山崎君が鉄棒から転落し、足を骨折して慶應病院に入院したので、福岡君と見舞いに行つたことがあった。

昨平成30年春、港区が南青山に適当な土地が確保できたので、立派な児童相談所を翌年の4月から着工したいと発表した。早速住民説明会が持たれた所、一部住民グループの猛反対を受けた。ここは高級住宅街だから、変な子供達を補導したり収容したりする施設は困るとし、都内の公立小学校で入りたい学校のトップの青南に貧乏人の子弟が入つては、地価が下がつたりしてダメだと訴えた。これは今時おかしな話だと思ったが、私のクラスを見ても昔は資産家やインテリ階級のほか薬店や文房具店、普通のサラリーマンの子弟も

沢山いた。しかし間もなく訴えたこのグループが不動産会社の回し者と分かり速やかに一件落着した。

青南の1年先輩に俣野さんという方がおられて仲良しだった。お父上は飯野海運創立者の養子になられて、青南近くの豪邸に住んでおられた。鹿児島市に土地を持っておられたようで、戦後そこに県立体育館を建てて寄贈なされた。医学部の卒業式がそこで行われたのを思い出す。

歌人で有名な斎藤茂吉さんは精神科医でもあり、青南の近くに大きな病院があった。2年先輩に御子息の宗吉さんがあられ、昆虫採集仲間で自宅の夥しい数の標本を見せて貰ったことがある。彼も精神科医になるが、どくとるマンボウの愛称で親しまれる作家の北 杜夫として有名になった。

直接には知らないが芸術家の大先輩・岡本太郎や、3年位後輩に大俳優・仲代達矢がいたらしい。若手タレントの高橋一正も青南出身らしい。

昭和16年6年生になった時、6月に陸軍大佐の父はベルリンの日本大使館に長期出張となった。支那事変はだらだらと続いており、蒋介石総統は盛んに米国に支援を頼んでいた。それで日本に石油禁輸などを行ったので日米交渉が持たれていた。12月8日、朝起きると日米開戦を告げるラジオの臨時放送が繰り返されているので驚愕した。米国に勝てるわけはないと思っていたが、日本の連合艦隊が真珠湾を奇襲し、米国の太平洋艦隊をほぼ壊滅させたと報道され、二度ビックリした。ここで日対米・英・支・蘭の戦争と、欧洲の独・伊対仏・英・露戦争と共に第二次世界大戦が始まった。青南女子クラスに連合艦隊司令長官の山本五十六大将の二女正子さんがいて、マ

スコミが来て正子さんを壇上に立たせて私達が万歳をしたりした。

翌昭和17年春は中学受験で東京で最難関と言わされた東京府立一中に合格出来て嬉しかった。一中で杉四で級長していた奥本君にバッタリ会った。大変驚いていたが、私が青南に行ってから猛烈に勉強したんだと言うと納得した。

当時は東京府東京市と言っていた時代で、のちに都立日比谷高校となり、昭和42年まで東大合格三桁の首位を保っていた。私は素敵な学校で学べて良かったと思ったが、戦争には勝たねばの思いから、1年修了した時父の後を継いで陸軍幼年学校を受験し合格し、一中では海軍兵学校に進学するのは少数いたが、陸軍の学校にいくのは珍しいことだった。同窓会名簿を見ると、大先輩に夏目漱石や谷崎潤一郎など文豪や、日本画の横山大観など有名人は枚挙に暇がないほどだが、私も中退者として載っていた。鹿児島に帰って法務大臣を務められた保岡興治さんが昭和33年卒の同窓で、2~3回お会いしたことがある。

欧洲にいた父は陸軍少将に進級しハンガリーの日本公使館付き武官を務めていたが、ソ連が参戦する直前に帰国し、原爆投下を受け、昭和20年8月15日遂に敗戦の日を迎えた。父達が海軍と外務省の暗号は解かれている可能性があると警告したのに、対処しなかったので、ミッドウェイ海戦以来海軍の惨敗が続き、山本長官の視察飛行機は待ち伏せに会い、長官は戦死なされた。

戦後還暦を迎えた時、一中同期会を開くから絶対出席しようと案内がきたので、数十年振りに皆と会うことになった。司会の豊田達郎君（豊田自動車副社長、後に社長）が幼年学校に行った林君が鹿児島から来てくれたので、

と最初に挨拶させられた。百人位の集まりだったが、皆さんそれぞれの分野で偉くなつており、青南で1組の級長していた大塚雄司君は建設大臣を経験していた。

少年時代の思い出は尽きないが、青南2組の担任は新婚間もない素敵な岩瀬先生だった。後に校長になられた時、東京校長会を代表して宮中歌会始めに招かれた時の感激は、忘れられないと言っておられた。

昭和の末頃、私が国立療養所阿久根病院院長として勤めていた時、300床以下の70程の病院を経営移譲等で減らす事が決まった。暫くして出水郡医師会から阿久根病院の移譲を受けたいと申し出があったので、再編成のトップバッターとなってしまった。平穏だった病院は大騒ぎとなり、職員組合は全国で4万5千人の組合員をもつ「全医労」の助けを借りて移譲反対の狼煙を挙げた。それからは徹夜に及ぶ団体交渉が頻繁に行われ、まともな診療が難しくなった。約1年後の平成元年10月1日の深夜、外は組合員数百人が反対を叫ぶ怒号の中、私が病院のマスターキーを出水郡医師会長の花北良臣先生に渡し、移譲のセレモニーが終了した。その時NHKテレビニュースが“深夜の交代劇”として全国放送した。翌朝東京から電話ですよと言うので出ると、青南の岩瀬先生だった。「昨日テレビニュースを見たが大丈夫か」と聞かれた。大丈夫ですと答えたが、何時までも教え子のことは忘れないとおられるのだと分かると、感激で涙が出る思いだった。

その後、全医労は諦めたのか反対も無く、数年で再編成は完了した。結果として阿久根病院が日本の医師会病院創設の第1号となつた。平成17年11月発行の日医ニュースによれば、全国の医師会病院が80超となっているの

は、その先駆となった花北先生の功績は大きいとして、第58回日医設立記念の時、表彰された。

令和元年6月、青南2組の世話役をしてくれる野崎君（元・東京電力幹部）からクラス会の案内が届いた。2年前の米寿祝いを兼ねたクラス会には、肝臓がん治療中だったが何とか出席できた。しかし今回は残念ながら出来ないと返事した。会終了後野崎君から報告があり、出席者は少なく、彼のほか高尾山周辺にいつも一緒に昆虫採集を行っていた金子君（元・都立大理学部長）、私が青南に転校する前までクラスのボスだった田中君（元・マニラ駐在日本大使）、慶應大英語教授の小長谷君、空手の達人で協会幹部の岩本君、舞台装置ベテランの神取君の6人だったという。

満90歳の卒寿を迎えた今日、少年時代ではやはり青南時代が一番楽しく面白かったと思う。